

基本構想素案について

審議会プロジェクトチーム会議

○プロジェクトチーム会議議論の経緯

1 前提

基本構想の「将来像」、「まちづくりの考え方」、「まちづくりの目標」を審議会で議論、決定するにあたり、その議論のたたき台となる原案・考え方を作成する。

その際、アンケート結果、ワークショップ結果、行政としての基本計画に対する考え方を勘案し、新たな 10 年という時代性を加味したものを作成することとなる。

2 考え方

上記資料等から、まず「まちづくりの基本的な考え方」の候補を複数あげることからスタートし、それを審議会で議論決定し、それを受けてキャッチフレーズ的な意味合いの強い「将来像」の議論決定を行う。

その後、行政担当者に加え、総合計画体系図の検討とともに「まちづくりの目標」案を作成し、審議会で議論決定する。

その間、必要に応じプロジェクトチーム会議を開催する。

3 資料の捉え方

(1) アンケート結果

大きな流れを捉える資料と考える。具体的な施策で活用できる部分については、基本計画策定時に活用する。

(2) ワークショップ結果

一つひとつの文言にあまりとらわれず、その背後にある考え方をくみ取るようにする。

(3) 行政の考え方

十分にくみ取るようにすること。どの自治体にも共通の課題が語られる部分は咀嚼して表現に組み入れるように努力する。

4 行政の考え方のポイント

- 協働のまちづくり
- 人口減少への対応
- 中東北の拠点都市の形成
- (○ ILC を基軸としたまちづくり)
- (○ 東日本大震災への対応)

5 まちづくりの基本的な考え方の候補を考える

- (1) アンケート結果からは、大きな流れとして交通インフラ、生活インフラ、教育インフラが整い、雇用に恵まれ、自然環境が豊かな生活満足度が高い街を求める要素が感じられる。

バランス重視の姿勢があり、故郷を愛する視線がそこかしこにある。

- (2) ワークショップのグループのとりまとめかたは、笑顔、住みたくなる、帰ってきたくなる、このまちに住んで良かった等、一関に対する愛情が感じられる表現が多く表れ、いろいろ不満はあるけれど、一関ラブが根底に流れている。

さまざまな意味の地域資源を活用し、誇り、生きがいを感じて生活でき、生活の基礎となる地域経済がしっかりしているという理想が感じられる。

- (3) そのような検討をもとに、外に大きくアピールする基本構想ではなく、市民の最大幸福を目指す内向きの方向性が求められていると考えられる。

子どもたちが地域に誇りを持って育ち、このまちに暮らし、幸福を十分に感じてもらえるようなまちづくりが求められていると思われる。

中東北の拠点に関しては、仙台圏との差別化が必要で、不特定多数対象ではない、特定少数の聖地を目指す拠点化が必要かと思われる。

6 まちづくりの基本的な考え方案

- (1) 地域の宝を見出し育み活かすまち 一関（地域資源の最大活用）
- (2) ふるさに誇りを持ち、生きがいにあふれるまち 一関
（協働、人口減少、ILC）
- (3) 市民幸福度を最大にするまち 一関（協働・中東北の拠点）
- (4) 未来を支える子どもたちを最大支援するまち 一関
（教育・人口減少・中東北の拠点）
- (5) 地域資源を活かしのぎわいを生み出すまち 一関（経済）
- (6) 仙台圏を支える自然豊かな中東北拠点のまち 一関
- (7) 暮らしの安心・安全を地域で支えるまち 一関（防災）